

縄文晩期の手取川扇状地における外来系土器の移入形態

山 本 直 人

はじめに

縄文時代晩期の手取川扇状地においては東北地方から亀ヶ岡系土器が移入された可能性が指摘され、西日本の突帯文系土器や遠賀川系土器が移入されたことも報告されている。しかしながら、土器自体が移入されたのか、あるいは製作技術が移入されたのか、その移入形態についてはほとんど論究されていない。こうした課題を解決するための試行として、本稿では他地域からの土器や技術の移入形態について想定をおこない、その可能性の多寡を探求していくものである。

この目的を達成するために、東北地方からの移入形態に関しては、金沢市中屋サワ遺跡から出土した縄文土器をもとに検討していく。西日本からの移入形態に関しては、野々市市御経塚遺跡から突帯文系土器が出土しており、その移入形態について検討をくわえる。また、野々市市栗田遺跡や白山市乾遺跡、白山市八田中遺跡から遠賀川系土器が出土しているので、その移入形態についても検討をくわえる。

外来系土器の移入形態を検討する前に、手取川扇状地の晩期社会の基本性格を把握し、土器型式編年に付加された較正年代を明示した上で論をすすめていく。

1. 手取川扇状地の晩期社会の基本性格

まず、縄文時代晩期の地域社会について田中良之氏の説を確認し、それをもとにして手取川扇状地の晩期社会の基本性格を把握しておきたい。

田中良之氏は「縄文時代のある段階以降は部族社会であり、後期以降は同じ祖先と系譜をもつ氏族に分割され、それが部族へと統合されて地域社会を形成していた可能性が高い。そうすると、地域社会すなわち部族は複数の氏族が構成し、集落は氏族の分節である出自集団が複数で構成することになり、その統合は祭祀などで行ったことが想起される」(田中 2008 : 171)としている。祭祀や儀礼に関する遺物や遺構は「社会的統合の機能との関連で理解されよう。そして、これらを主催する部族・氏族の族長や呪術者・長老などのリーダーたちの存在も予想される」(田中 2008 : 173)としている。

ここで「地域社会」という用語の意味についてみていくと、社会学の辞典では「一定の地域

的な広がりとそこに居住する人びとの帰属意識によって特徴づけられる社会」(濱嶋・竹内・石川編 2005: 424)、「一定の地理的空間を基礎に成立する社会システム」(宮島編 2003: 166)と定義されている。また、辞書では「一定の社会的特徴をもった地域的範囲の上に成立している生活共同体」(新村編 1969: 1418)、「一定の地域的範囲の上に、人々が住む環境基盤、地域の暮らし、地域の自治の仕組みを含んで成立している生活共同体」(新村編 1998: 1700)と定義されている。

石川県南部における縄文時代晩期の遺跡の分布状況をもとに上記のことを検討すると、8世紀の加賀国ぐらいの地域的範囲に居住する氏族が統合されて、その範囲を領域とする部族が構成されていたと現時点では考えるものである。遺跡の継続性や規模から、手取川扇状地の遺跡群は部族の中でも中核的な役割をはたしていたと考えている。

2. 縄文晩期の土器型式編年と較正年代

北陸における縄文時代晩期の土器型式編年と各土器型式の較正年代を確認しておきたい。

晩期の土器型式編年に関して、吉田淳氏は文様を有する土器の型式について「晩期は御経塚 1～3 (B～BC 1)・中屋 1 (BC 2)・中屋 2 (C 1 前半)・中屋 3 (C 1 後半)・下野 (C 2)・長竹 (A)とし、並行する大洞編年を()と考え」(吉田 2009: 6)ている。

また、筆者らは野々市市御経塚遺跡や金沢市中屋サワ遺跡、金沢市藤江C遺跡などから出土した土器に付着した炭化物を試料に AMS 炭素14年代測定を実施してきており、その結果から各土器型式のおおまかな較正年代を以下のように考えている(山本 2006・2010)。晩期前半では御経塚式が *c.*1300～*c.*1100 cal BC、中屋式が *c.*1100～*c.*900 cal BC、晩期後半では下野式が *c.*900～*c.*800 cal BC、長竹式が *c.*800～*c.*600 cal BC である。長竹式に後続する弥生時代前期末の柴山出村式は *c.*600～*c.*350 cal BC である。なお、土器型式の較正年代の大半は型式間で重複がない形であるが、重複していることも予想され、今後の研究の進展をまって訂正していきたい。

3. 亀ヶ岡系土器の出土状況と移入形態

(1) 中屋サワ遺跡から出土した精製土器

手取川扇状地の縄文時代晩期の遺跡において東北地方から移入された精製土器が存在することに最初に注目したのは西野秀和氏である。西野氏は晩期の遺跡を調査すると東北地方からの移入品と考えられる精製土器片が1・2点出土し、胎土、調整、焼成、色調などから在地の土器と識別されることを指摘している(山本ほか 1986)。

本稿では金沢市中屋サワ遺跡から出土した精製土器をもとに、それらが移入土器か否かを検

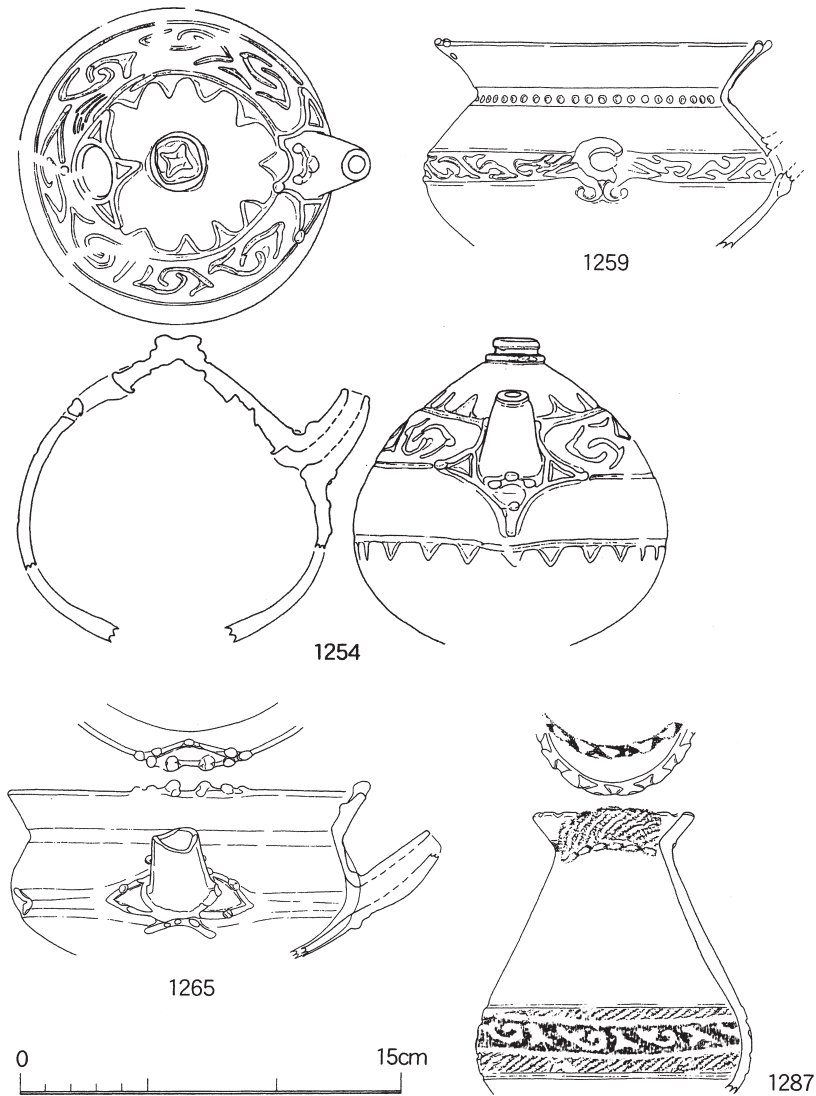


図1 金沢市中屋サワ遺跡の縄文土器実測図1 (縮尺1:3、番号は報告書と一致する。)

討する。同遺跡の2001年度・2002年度・2006年度の3次にわたる調査では、後期末の八日市新保式から長竹式まで出土しており、もっとも出土量の多いのが中屋式で、ついで御経塚式となっている(谷口・前田ほか2009、谷口・谷口ほか2010)。とくにSD40と遺構名がつけられた旧河川跡からは残存状態が良好な縄文土器が大量に出土しており、これらの中で特段の精製品は、注口土器3点、壺形土器1点、小型の鉢形土器3点、小型の深鉢形土器2点、合計9点である。以下、これらを順に記述していく。

図1の1254の注口土器は文様がかくれるくらいに外面全面に赤漆がぬられている。胴部の

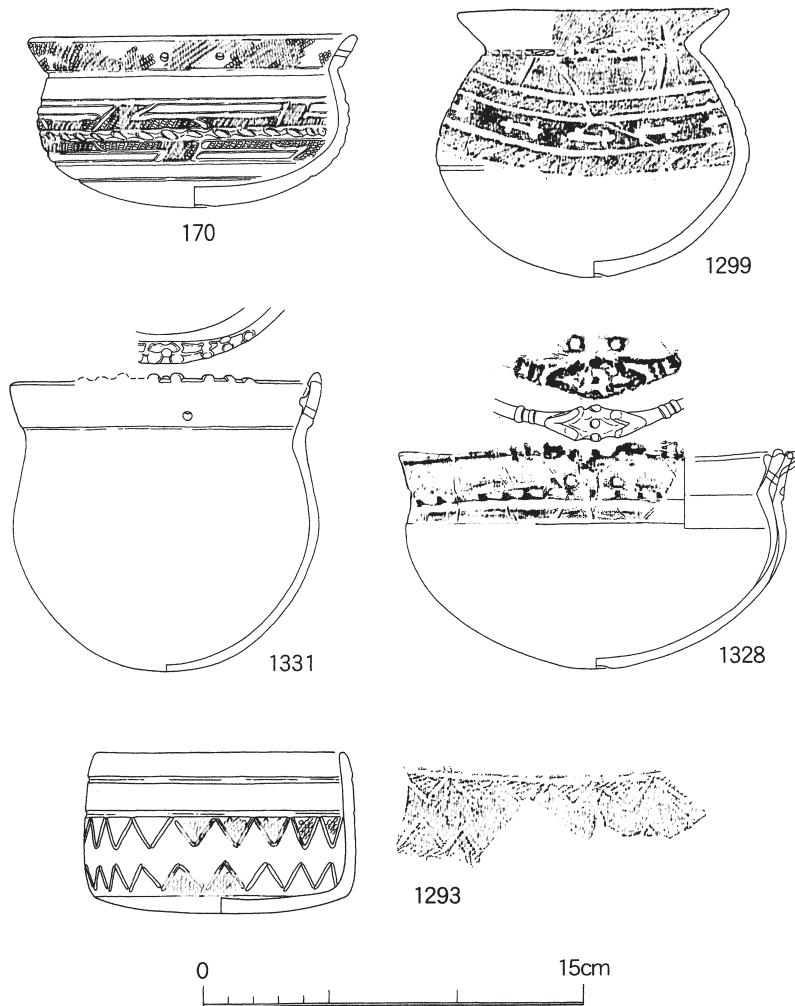


図2 金沢市中屋サワ遺跡の縄文土器実測図2 (縮尺1:3、番号は報告書と一致する。)

文様帯の上下端には鋸歯状の文様が、胴部上半には入組三叉文がほどこされている。

図1の1259の注口土器は外面と内面口縁部に黒色化処理がほどこされている。「く」の字状に屈曲する頸部には列点文が、胴部には入組三叉文がほどこされている。

図1の1265の注口土器は無文で、両面ともに黒色化処理がほどこされている。口唇部には珊瑚状突起がつけられている。

図1の1287の壺形土器は外面と内面口縁部に黒色化処理がほどこされ、口唇部と外面口縁部は赤彩されている。口唇部には三角形のえぐりこみ、口縁部には縄文、頸部には列点文、胴部には縄文と入組三叉文がほどこされている。

図2の170の小型の鉢形土器は両面とも黒色化処理がほどこされ、外面沈線部に赤色顔料が

のこっている。胎土は灰色を呈し、口縁部は両面とも丁寧に研磨されている。口縁部には縄文が、胴部には縄文と列点文がほどこされている。

図2の1299の小型の深鉢形土器は口縁部両面に黒色化処理がほどこされ、外面の口縁部から胴部上半の縄文と沈線部分に赤彩された痕跡がのこっている。口縁部から胴部上半には縄文がほどこされ、「く」の字状に屈曲する頸部には列点文、胴部上半には「+」を横に連続した文様もほどこされている。

図2の1331の小型無文の深鉢形土器は両面とも黒色化処理がほどこされ、口唇部から内面口縁部に赤彩痕がのこっている。土器の厚さはひじょうに薄い。

図2の1328の小型の鉢形土器は両面とも黒色化処理がほどこされ、口唇部の珊瑚状突起に赤彩された痕跡がのこっている。無文で、頸部には列点文がほどこされる。土器の厚さはひじょうに薄い。

図2の1293の小型鉢形土器ではその厚さはひじょうに薄く、鋸歯状文様の沈線や縄文に赤色顔料がのこっている。

これらに共通する特徴は、小型、器厚が薄い、胎土に砂礫をほとんどふくまない、研磨が丁寧、黒色化処理がいちじるしい、手にもつと軽く感じる、などである。これらは秀逸な精製土器であるが、東北地方の亀ヶ岡式土器とくらべてみると文様や器形は異なっている。これらはやはり中屋式土器にふくめるのが適切であり、吉田淳氏の分類では中屋2式・3式(吉田2009)、久田正弘氏の分類では中屋2式(久田2012)になる。

(2) 亀ヶ岡系土器の移入形態

以下の三つの場合が想定できる。まず、大きくは精製土器自体が移入された場合と製作技術が移入された場合が想定でき、後者はさらに二つの場合が想定できる。

1) 精製土器自体が移入された場合

可能性がないわけではないが、ほぼないと考えている。中屋サワ遺跡からは遮光器土偶の破片が出土していることから移入品が絶対にはいいきれないが、遮光器土偶の胎土には砂礫がまざり、つくりが悪いため、移入品でなく、在地で製作された模倣品の可能性も高いと考えている。

もし精製土器が東北地方で製作された移入品である場合は二とおりの考え方ができ、一つは交易品として移入されるというもので、もう一つは贈り物として移入されるというものである。

まず、交易品と想定した場合を考えてみる。晩期前半の手取川扇状地には亀ヶ岡系土器は移入されるが、手取川扇状地の文物は東北地方へとくに移出されていない。交易は移入と移出の双方が存在してなりたつものなので、移出品が存在しないことから交易はなかったことになり、交易品説は成立しなくなる。

つぎに、贈り物と想定した場合を考えてみる。手取川扇状地の氏族あるいは周辺の氏族を統合した部族の族長の継承儀礼などが開催された時に、招待された東北地方の部族・氏族の族長

を中心とした集団が贈り物として亀ヶ岡系土器を持参したと推測している。

2) 製作技術が移入された場合①

東北地方の人びとが手取川扇状地にきて製作技術をおしえ、在地の伝統や流儀、嗜好にあわせて類似品が製作された場合が想定できる。三つの想定の中で可能性がもっとも高いと考えている。

東北地方の人びとがどのような時に手取川扇状地にきたのかということであるが、招待された族長の継承儀礼に参加する時にきたと考えている。手取川扇状地の氏族あるいは部族の族長の継承儀礼などが開催された時に、東北地方の部族・氏族の族長を中心とした集団が招待され、東北集団は遠距離の移動をしられるために移動の邪魔になる物やこわれやすい物を贈り物としてもっていくことができず、身につけている技術を滞在中に手取川扇状地の人びとにつたえ、宿泊や食料への返礼としたと考えている。精製土器の製作技術や掘立柱建物の建築技術をもった技術者も集団のなかにふくまれていて、継承儀礼への参加で滞在している時に技術指導をおこない、指導を受けた在地の人びとが習得した技術を駆使して類似品を製作したと推測している。とくに中屋式期に頻繁にそのような交流があったと考えている。

3) 製作技術が移入された場合②

手取川扇状地の人びとが東北地方まででかけて行って技術を習得し、手取川扇状地にかえってきて在地の伝統や流儀、嗜好にあわせて類似品を製作した場合が想定できる。

東北地方の部族や氏族の族長の継承儀礼に招待された時にでかけていったと推測している。

4. 突帯文系土器の出土状況と移入形態

(1) 御経塚遺跡から出土した突帯文系土器

手取川扇状地において突帯文系土器が出土している遺跡はきわめて少なく、御経塚遺跡から少量出土している程度である(図3、吉田ほか1989・吉田ほか2003)。吉田淳氏の報告(吉田ほか1989)によれば、図3の1は片口状の器形で丸底気味になり、内面口縁部と外面全体に赤彩痕がのこるとされている。図3の6の外面にも赤彩された痕跡がのこっている。図3の18は胴部上半に段をもつ壺型土器である。久田正弘氏は、図3の431は突帯文第1期前池式段階であるとし、下野式前半(大洞C2式前半)に位置づけている(久田2012)。図3の18は焼成前に赤彩されていることから、夜臼式の丹塗研磨技法の影響を想定している。

吉田淳氏は突帯文系土器を「東海や西日本地域の影響を受けたもの」(吉田ほか1989:92)とし、久田正弘氏は「石川県における西日本突帯文系土器は、模倣土器が多く、その帰属時期がむずかしい」(久田2012:48)とのべるにとどまり、模倣された突帯文系土器が石川県に移入されたのか、石川県で突帯文土器を模倣して土器が製作されたのか、と問題については言及していない。

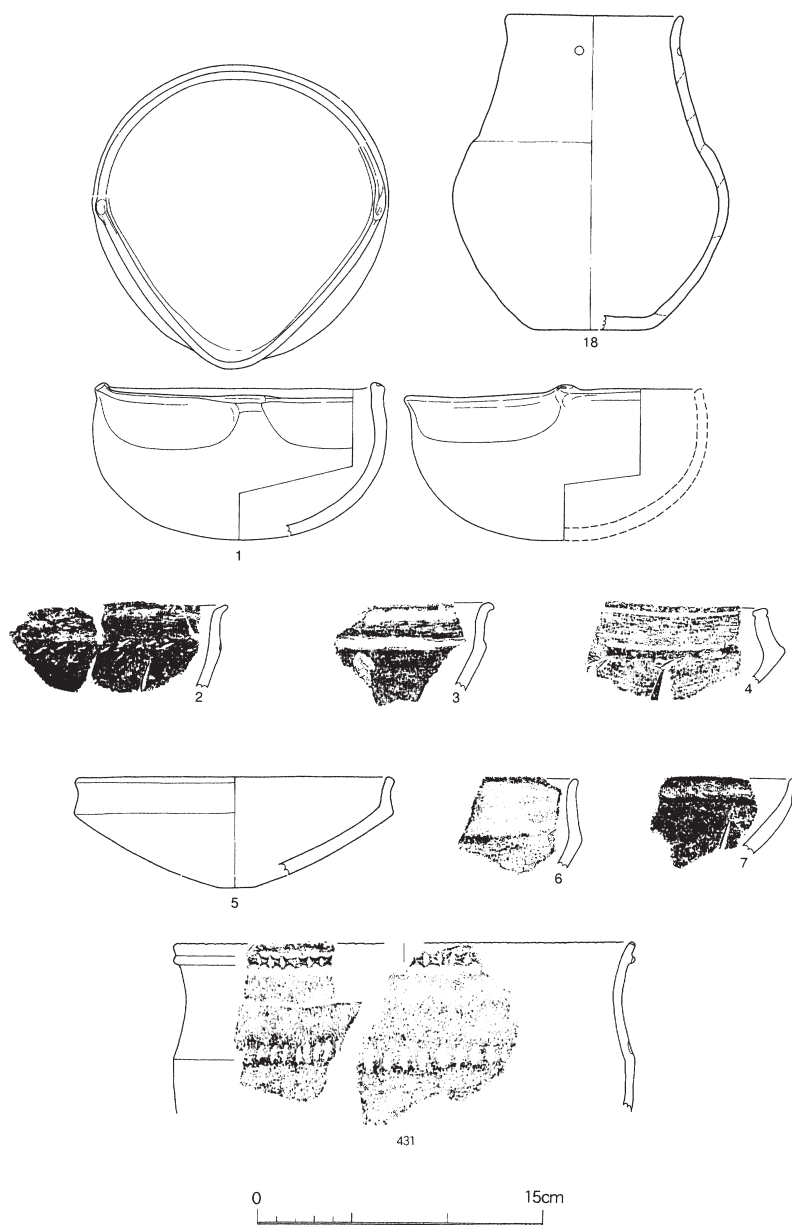


図3 手取川扇状地の突帯文系土器実測図（縮尺1：4、番号は報告書と一致する。）

(2) 突帯文系土器の移入形態

製作技術が移入された場合と土器自体が移入された場合が想定できる。

1) 製作技術が移入された場合

出土した点数はごくわずかで、技術が移入されて少量の突帯文系土器が製作されたと想定す

ることもできるが、その可能性はきわめて低いと考えている。

2) 土器自体が移入された場合

三とおりの考え方ができ、第一は交易品、第二は贈り物、第三は土産である。

第一の交易品については、交易活動らしい文物の移出入はないので交易品とは考えがたい。

第二の贈り物については、手取川扇状地で部族や氏族の族長の継承儀礼などが開催された時に、招待された東海地方や近畿地方の部族・氏族の族長とその集団が贈り物として突帯文系土器を持参した場合が想定できる。

第三の土産については、手取川扇状地の人びとが東海地方や近畿地方まででかけて行って突帯文土器を実見し、突帯文土器に似せた土器を製作して土産としてもちかえた場合が想定できる。東海地方・近畿地方の部族や氏族で開催された族長の継承儀礼に招待された時にでかけていったと推測している。

5. 遠賀川系土器の出土状況と移入形態

(1) 粟田・乾・八田中の3遺跡から出土した遠賀川系土器

手取川扇状地の晩期後半の遺跡で遠賀川系土器が出土しているのは、野々市市粟田遺跡と白山市乾遺跡、白山市八田中遺跡である。3遺跡の資料についてみていく。

1) 野々市市粟田遺跡

B調査区では壺形土器の胴部上半片が1点出土しており(図4の1)、久田正弘氏は畿内第I様式古段階(長竹式)に相当するとしている(久田1991)。C調査区では壺形土器の底部が1点出土している。

2) 白山市乾遺跡

8点の壺型土器が出土している(図4の637~643)。これらの所属時期について、岡本恭一氏は長竹式期後半から柴山出村1式期に併行するものと考えている(岡本2001)。

3) 白山市八田中遺跡

削り出し突帯をもつ壺型土器片が2点出土しており(図4の2ab)、削出突帯第II種少条で、畿内第I様式中段階に比定されている(久田ほか1988)。その後、久田正弘氏は柴山出村前半に位置づけている(久田2012)。

(2) 遠賀川系土器の移入形態

製作技術が移入された場合と土器が移入された場合の二とおりのあり方が想定できる。

1) 製作技術が移入された場合

器種は壺形土器ばかりで、外反口縁の甕形土器は皆無である。また、壺形土器の出土点数はごくわずかである。技術が移入されて少量の土器が製作されたと想定することもできるが、その可能性はきわめて低いと考えている。

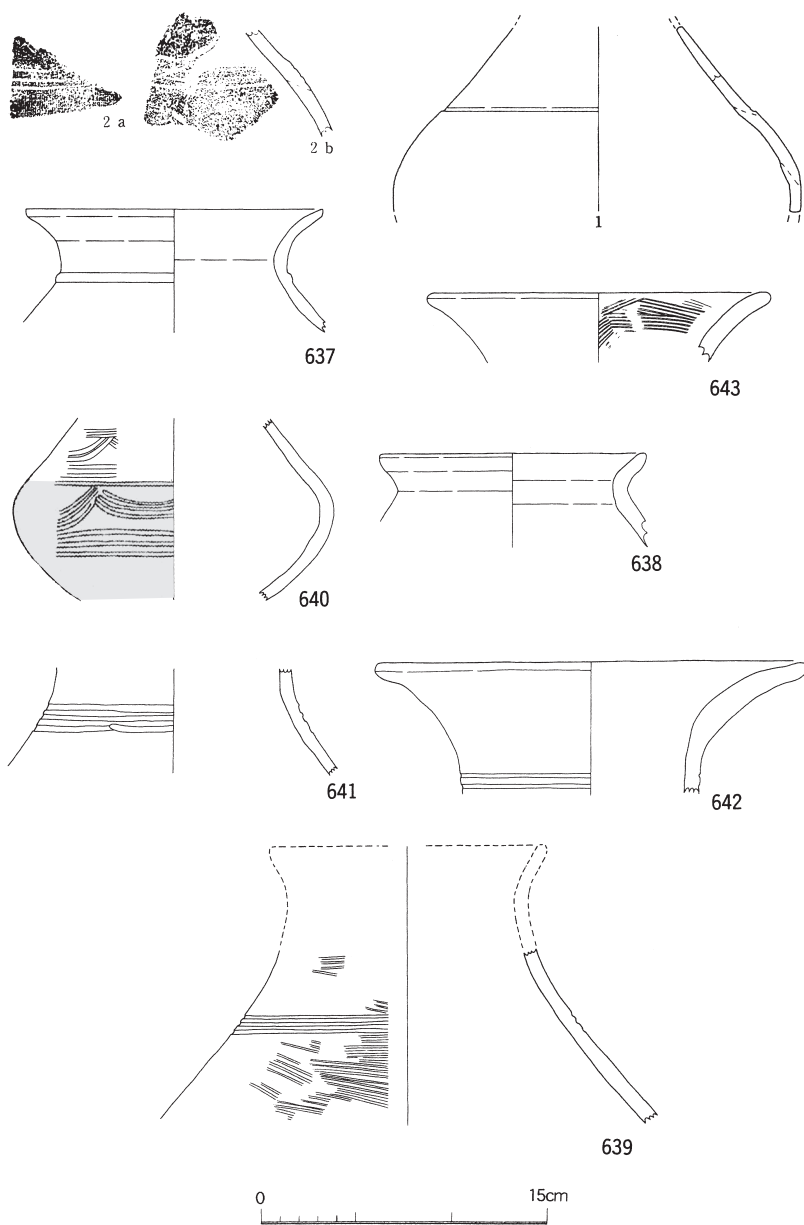


図4 手取川扇状地の遠賀系土器実測図(縮尺1:4、番号は報告書と一致する。)

2) 土器自体が移入された場合

三とおりの考え方ができ、第一は交易品、第二は贈り物、第三は土産であるが、交易品は突帯文系土器同様に否定される。

贈り物と土産については、継承儀礼に招待された西日本の部族あるいは氏族の族長とその集

団が贈り物として持参したことによって手取川扇状地に移入されたと推測している。または近畿地方の部族や氏族で開催された族長の継承儀礼に招待された時にでかけていった人びとが土産としてもちかえたとも推測できる。

おわりに

手取川扇状地は縄文時代後晩期の地域社会を研究するうえで絶好のフィールドとなっており、筆者はその形成過程と変容過程の解明にとりくんでいる。本稿もそうした研究の一環で、地域社会としての部族が複数の氏族から構成されるとする田中良之氏の説を前提とし、族長の継承儀礼への出席という推測を介在させて他地域からの外来系土器の移入形態を想定し、その可能性の大小を推察したものである。

亀ヶ岡系土器の場合は、人の移動にもなって製作技術が手取川扇状地に移入され、在地の主体性を維持しながら亀ヶ岡式土器を手本に類似した土器が製作された可能性が高いと推察した。突帯文系土器や遠賀川系土器では、土器そのものが贈り物や土産として移入された可能性の高さを推察した。突帯文系土器が出土しているのが手取川扇状地の拠点集落の御経塚遺跡であるのに対し、遠賀川系土器が出土している3遺跡は新興の集落や墓域である。新しい文化の象徴ともなる遠賀川系土器を保守的な御経塚遺跡はうけいれなかったのであろう。

本稿をまとめるにあたり、吉田淳氏、谷口宗治氏、野々市市教育員会、金沢市埋蔵文化財センター、財団法人石川県埋蔵文化財センターにはたいへんお世話になりました。末筆ながら、ご芳名を明記して衷心より感謝申し上げる次第です。

引用文献

- 岡本恭一、2001、『松任市乾遺跡』、財団法人石川県埋蔵文化財センター：金沢。
新村 出編、1969、『広辞苑』第2版、岩波書店：東京。
新村 出編、1998、『広辞苑』第5版、岩波書店：東京。
田中良之、2008、『骨が語る古代の家族』歴史文化ライブラリー252、吉川弘文館：東京。
谷口宗治・前田雪恵・向井裕知ほか、2009、『石川県金沢市 中屋サワ遺跡Ⅳ 下福増遺跡Ⅱ 横江荘遺跡Ⅱ』金沢市文化財紀要255、金沢市埋蔵文化財センター：金沢。
谷口宗治・谷口明伸・向井裕知ほか、2010、『石川県金沢市 中屋サワ遺跡Ⅴ』金沢市文化財紀要262、金沢市埋蔵文化財センター：金沢。
濱嶋 朗・竹内郁郎・石川晃弘編、2005、『社会学小辞典』新版増補版、有斐閣：東京。
久田正弘ほか、1988、『八田中遺跡』、石川県立埋蔵文化財センター：金沢。
久田正弘、1991、『縄文・弥生の土器』『粟田遺跡発掘調査報告書』、46～49頁、社団法人石川県埋蔵文化財保存協会：小松。
久田正弘、2012、『石川県を中心とした縄文時代晩期中葉から後葉の土器編年について』『石川考古学研究会々誌』第55号、43～48頁、金沢。

- 宮島 喬編、2003、『岩波小辞典 社会学』、岩波書店：東京。
- 山本直人ほか、1986、『石川県能美市辰口町 岩内遺跡発掘調査報告書』、石川県立埋蔵文化財センター：金沢。
- 山本直人、2006、「御経塚遺跡と地域社会」『野々市町史』通史編、34～47頁、石川県野々市町。
- 山本直人、2010、「縄文時代晩期における気候変動と土器型式の変化」『名古屋大学文学部研究論集』167（史学56）、59～67頁、名古屋。
- 吉田 淳ほか、1989、『御経塚遺跡Ⅱ』、野々市町教育委員会：石川県野々市町。
- 吉田 淳ほか、2003、『御経塚遺跡Ⅲ』、野々市町教育委員会：石川県野々市町。
- 吉田 淳、2009、『御経塚遺跡Ⅳ』、野々市町教育委員会：石川県野々市町。

Abstract

The *Kamegaoka* type, the *Tottaimon* type and the *Ongagawa* type
of the Final Jomon, Tedorigawa Alluvial Fan

Naoto YAMAMOTO

The *Okyouduka* type of *c.*1300-*c.*1100 cal BC and the *Nakaya* type of *c.*1100-*c.*900 cal BC in the Tedorigawa alluvial fan look like the *Kamegaoka* type of the Tohoku district because they are greatly influenced by the *Kamegaoka* type.

The shards of *Tottaimon* type are found during the *Shimono* type of *c.*900-*c.*800 cal BC in the Okyouduka site, and these come from the *Tottaimon* type of the west part of the Japanese Islands. The shards of *Ongagawa* type are found during the *Nagatake* type of *c.*800-*c.*600 cal BC and the *Shibayama-demura* type of *c.*600-*c.*350 cal BC in the Awata site, the Inui site and the Hattanaka site, and these come from the *Ongagawa* type of the west part of the Japanese Islands.